

日本の龍文化—龍と色彩—

Dragon Culture in Japan—Color of Dragon—

岡崎 信雄

イオン工学センター

Nobuo Okazaki

演者は1988の辰年（龍年）、中国滞在の機会を得、伝統的な民族文化として、中国の人々の心に今なお深く根ざしている龍文化の一端を垣間見る好機に恵まれ、その内容を1991年5月の日本色彩学会全国大会において“中国の龍と色彩”と題し、また1992年2月日本色彩学会関西支部大会に於いて“中国・龍のある風景—龍と色彩—”と題し発表した。その後、日本の中の龍文化に興味をいだき、渡来文化の龍がどのように日本の中に溶けこんでいるのかを、機会を見ては調べて来た。

日本への龍文化の伝来が何時の時代か定かでは無いが、稲作農耕の伝来と同時期ではないかとの説が有力である。

それによると、稲作は中国雲南省南部、ミャンマー、ラオスと国境を接する西双版纳地方で発生し、中国の華南、華中、朝鮮半島南部を径由し、紀元前4、5世紀頃日本に伝来した。ちょうど、この時期、中国は春秋戦国の激動期に当り、呉、越の戦いに見られるような、黄河流域の漢族が長江流域に勢力拡大を計った時期に当たり、漢族に圧迫された越族は、一部は華南へ、一部は日本列島方面へと移動し、稲作や稲作と密接に結び付いた水神の龍文化が伝えられたと言う説である。春秋時代、越王勾践は呉を撃って山東半島へ進出し、また元封2年（紀元前109年）漢が山東半島から朝鮮半島へ出兵した史実にてらし、当時既に中国から日本列島への海上交通路が開けており、今様ボートピープルが龍文化伝来の担い手で有ったのであろう。この説に従えば、日本の龍文化は既に2000年の歴史を持つ事になる。

日本文化の特徴は、異文化の許容と適応性に秀れ、またその変様による独自文化の形成に有ると言われているが、雨水の神、仏教の守護神、陰陽説の四神、あるいは権力、吉祥の象徴としての龍がどのような独自文化を形成しているかは興味のある所である。

1. 古代の龍（古墳時代—奈良時代）

1. 1. 銅鏡と環頭大刀の龍

（3—7世紀）

魏志和人伝によると、邪馬台国の女王卑弥呼が、景初3年（239年）と正始4年（243年）に魏の皇帝に朝貢し銅鏡100枚を賜ったが、それと関係が有るとされる龍と虎を浮彫した、龍虎鏡が出土している。また首長の権威を示す環頭に双龍の装飾を施した、環頭大刀が出土している。

1. 2. 高松塚古墳と龍（7—8世紀）

彩色された龍として、今のところ、最も古いのは、1972年奈良県明日香村の高松塚古墳に於いて発見された極彩色の壁画で有る。中国古代の天文学、星宿の二十八宿に従い、東西南北の四方位に東方七宿、北方七宿、西方七宿、南方七宿が、また四種類の動物、四神の青龍、玄武、白虎を配し、天空を支配すると言う思想が忠実に画かれている。

龍の姿態は“龍的芸術”（楊新、他、故宮博物院紫禁城出版社）の歴代龍紋演示図によれば、魏、晋、南北朝（220—600年）のものにちかい。

2. 王朝権力と龍

2. 1. 朝賀の儀と龍

文武天皇の太宝元年（701年）、元日には正門に鳥形幢をたて、左に日像、青龍、朱雀、右に月像、玄武、白虎の幡を立てる、中国の陰陽五行説の祥瑞思想の影響を強く受けた、祭祀の様式が導入されている。この様式は歴代天皇の即位の式にも用いられ、唐風の強いものであったが、大正天皇以降の即位の式からは、何故か姿を消している。

2. 2. 徳川幕府と龍

中国で最も多く龍を見ることが出来るのは、北京にある明、清両王朝の皇宮、故宮（紫禁城）である。日本では寛永11年から同13年（1634—1636）に造営された徳川家康を祀る日光東照宮であろう。東照宮の建造物や建造物を埋め尽くす彫刻群は金、朱

、黄、緑、青、白、黒等の色が用いられ絢爛豪華、極彩色の装飾が施されて居る。唐獅子、猊、麒麟、龍等の霊獣、鳳凰等の霊鳥の夥しい彫刻群にあって、その数が多く最も目を引くのが江戸時代、龍姿、龍形ともに完成の域に達したとされる王権シンボルの龍である。

2. 3. アイヌの首長と龍

現ロシア領の沿海州は、清朝の時代、中国領であつたが、沿海州ルートで北海道・厚岸のアイヌの首長に雲龍海水文の袷袍が贈られている。当時の中国とロシアの覇権争いが北方ルートからの龍の進入となったのであろう。

3. 祭礼と龍

3. 1. 村落共同体の祭礼と龍

縄文時代から弥生時代にかけて、原始信仰の対象は蛇であつたが、農作物の豊凶を左右する雨水の神の龍信仰が稲作農耕と共に伝来し、神への豊作祈願、感謝の祭祀に龍文化の影響が及び、蛇信仰と龍信仰とが融合し日本古来の龍蛇信仰になったとの説があり、稲藁で龍蛇のご神体を作り奉納する例が見られる。

3. 2. 都市共同体の祭礼

商品経済の発展と都市の人口増加は、京の祇園祭や大阪の天神祭のよう、祭礼の大形化へと発展したが、都市形祭礼にも多くの龍を見ることができる。

3. 2. 1. 祇園祭の山鉾と龍

京都三大祭の一つ祇園祭の始まりは、疫病や禍いをもたらす御霊を鎮める神事、祇園祭御霊会に遡るとされ、貞観11年(869年)に始まり、室町、安土桃山、江戸、明治、大正、昭和と一時の混乱期の中絶を除き、続けられてきた。

例年7月17日、絢爛豪華な装飾品に飾られた三十二基の山鉾が京の町を巡行する。鉾や山を彩る装飾品の前掛、水引、胴掛、見送りには、多くの鮮やかな色彩の様々な形の龍を鑑賞できる。

長刀鉾：雲龍文つずれ織(見送)中国明代

菊水鉾：雲龍の図(天井幕)日本現代

放下鉾：華嚴宗祖師絵伝(下水引)日本

船鉾：金地雲龍文厚入刺繍(下水引)日本江戸時代

つずれ錦龍・青海波(見送)

漆塗青貝螺細飛龍(大舵)

山伏山：雲龍波濤つずれ錦(見送)

五爪雲龍文刺繍(前掛)中国明代

あられ天神山：雲龍宝尽蓬萊山つずれ錦

(見送)中国清代

芦刈山：龍文中国刺繍(胴掛)中国清代

太子山：五爪龍・双龍(見送)中国清代

南観音山：龍王渡海(見送)日本現代

鯉山：登龍(胴掛)中国清代

黒主山：万曆帝龍王図錦織(前掛)

中国清代

3. 3. 龍船競争

龍船競争の言われは、中国の戦国時代、楚の懷王に使えていた屈原が、楚に秦が滅ぼされるのを知り絶望のあまり汨羅江に身を投じたが、屈原の霊を祭るため、龍をかたどった船、龍船による競争が始まった。長崎、沖縄の飛龍(ペーロン)競争は中国福建省から渡って来たもので、最近では大阪の天神祭に奉納されている。

3. 4. 神輿・山車と龍

神威を地域一帯にあまねく行き互るようにな、ご神体がお乗りになる神輿は、氏子に担がれ巡幸し、山車は鐘を鳴らし、太鼓を叩き神輿の巡幸を示威するが、天地四方を支配する四神を配する装飾が見られる。

4. 仏教と龍

龍は仏教の守護神でもある。

仏教誕生の地、印度ではナーガと呼ばれ蛇のコブラのことで有ったが、仏教東漸の地、中国ではそれが龍となり、日本へと伝来した。阿弥陀如来が常に説法している西方はるか彼方の幸いある所、極楽浄土。その極楽浄土を模したお寺の仏間に仏教加護の龍を見ることが出来る。

1991年解体修理された奈良・東大寺南大門の金剛力士像、吽形像の衣の内側にも飛龍が描かれている。彫刻部材の修理は行われたが、彩色の復元は行われていないから、1203年完成当時の彩色であろう。

吉祥を祈願し、社寺に奉納する額の絵、絵馬に龍を描いているのを良くみかける。

5. フェスティバルのパレードと龍

自治体主催、市民参加のお祭りは、信仰とは関係のない、神事ぬきのお祭りであるが、その最大のイベントは市内を巡行するパレードで有ろう。国際化時代に相応しく世界の踊りが見られるが、龍舞がパレードを盛りあげる。

6. おわりに

中华民族のシンボルと言われる龍が、日本に伝来していらい、既に2000年の年月を経て、今なを消えさる事なく継承されている。龍が持つ龍姿と龍形、その色彩が人々の心をとらえるので有ろう。吉祥のシンボル、神仏の加護の龍は、現代社会の経済発展の象徴でもある。